

つまりは、どんな仕事でも世間が必要とするから成り立つ、という先に述べた原則は世界という場においても忘れてはならない真理だというわけである。

日本古来の「三方よし」の石田梅岩さんの職業倫理と全く同じ発言が随所に感じられます。「会社は社会の公器」と良く言われますが、この意も同様に表現されていますね。
※CSR ⇒ Corporates Social Responsibility (企業の社会的責任)

「ロータリー」と「職業奉仕」を結論付けると
「ロータリアンに奉仕の心を授け、心の開発を促し、倫理と相手を思う心で職を営み、生き、全うな理性・良心・意志を備えさせたロータリアンをつくり、その人々の手で世の中に倫理を提唱する運動をせよ」だということになりますね。

「職業奉仕」哲学によって
人を育て、高め
世に倫理を提唱せよ!!

ホルガー・クナーク2020-21年度RI会長

2021年5月のメッセージ

妻のスザンヌと私は長年ロータリー青少年交換学生のホストファミリーを務めてきました。青少年交換は私にとってロータリーへの入口になったプログラムであり、心から大切に思っています。新型コロナウイルス対策で学生と家族の安全を守るためにロータリーの青少年交換プログラムが休止となったのは、特に参加者のことを思うと残念なことでした。これらの期間というのはかけがえのないものだからです。

しかし、パンデミックのいろいろな懸念を鑑みて、ロータリー理事会は実地に行く青少年交換を2022年6月まで休止することにしました。今後に期待する一方で、これまで青少年交換プログラムのために尽力してくれた役員、ホストファミリー、ボランティアの皆さんに感謝します。また、世界中の学生たちがお互いに、また地域社会とつながるように、地区はバーチャル交換を実施してはいかがでしょう。

青少年交換に参加できない人びとにも、ロータリーではほかにいろいろと機会があります。新世代交換はもっと広く知られるべきロータリープログラムです。18歳から30歳の青少年が個人、またはグループで地域社会の奉仕活動に参加し、インターンとして経験を積むことができる素晴らしい機会なのです。ジンバブエのローターアクター、シムカイ・マジャラさんは、3年前に新世代交換でラツツェブルクの我が家に滞在しました。

「新世代交換に申しこんだ時、人生を変えるような体験をすることになるとは思ってもみませんでした。このプログラムではそういう体験や、さらにはそれ以上のものが得られました。早く失敗して、速く学んで、自分自身でいることの重要性を教えてくれたのです。

中でも忘れられないのが夕飯時の会話。お世話になったどの家庭でも私をあたたかく、優しく迎え入れてくれたのが今でも忘れられません。赤の他人がなぜこんなに親身になってくれるのだろうと、何週間も不思議に思ったものです。このプログラムで出会ったすべての素晴らしい人びとから、謙虚でいることの大切さを学びました。新しい文化を理解するようになり、人として私たちを隔てているのはただ単に経験であったり、時には間違っただけの思い込みであったりすることに気づきました。

社会人としては、エンジニアとして自信が持てるようになりました。問題に取り組む他団体の姿を目の当たりにすることで、母国では私よりほかに適切な人材はいないことに気づいたのです。ドイツ北部から帰国すると私は昇進を断り、会社を辞めて、ファミリービジネスを立ち上げました。以前なら怖くてこんな決断はとて下せませんでした。

ひとえにロータリーファミリーのおかげです。ドイツでお世話になった友人やメンター、ファミリーたちは、自分たちが私の人生を変えたとは思っていないのではないのでしょうか。これでそのことを知ってもらえたら、と思います」

新世代交換はシムカイさんの人生を変えました。きっとあなたの人生も変わることでしょ。ロータリー会員なら誰でもいつでも同じようなことが体験できます。ぜひ今月はバーチャルな旅に出て、ほかのクラブのオンライン会合に参加してみてください。素晴らしい人びとと出会い、新しい友人を作る中で、ロータリーが世界中で大きく異なることに気づくことでしょ。

オンラインで築いたつながりを土台に発展させていきましょう。今後、また安全なときが来れば、ロータリー友情交換で実際に交換を体験してください。あらゆる年齢層のロータリー会員が参加でき、これもまた素晴らしいプログラムです。

現時点では直接的な面会が限られています。しかし、ロータリーはいつだって機会の扉を開くことを私たちは知っています。つながりを取り戻したいと希求するこの世界の期待に応えるため、コロナ禍の終息後にロータリーの交換プログラムを前よりも力強く実施できるよう、今は準備を進めていきましょう。

WEEKLY REPORT

東京ベイロータリークラブ

TOKYO
BAY
ROTARY
CLUB

国際ロータリー 第2580地区 東分区
VOL.30 2021年5月号(1)



Rotary Opens
Opportunities
ホルガー・クナーク会長

第2580地区ガバナー
野生司 義光(東京小石川RC)

30周年 新たなる一歩へ! 会長 岡本隆一

本日の卓話

なし

次回以降の予定

5月13・20・27日
臨時休会

2021年4月8日
例会報告

会員数 出席 出席率 前々回訂正出席率

・4月8日(木)、地区大会が開催されました。
地区大会の様子は、以下のURLからご視聴頂くことができます。

1 セレモニー

<https://youtu.be/2UszoqCVRJU>

2 ガバナー挨拶・RI会長代理挨拶・姉妹地区ガバナー挨拶等

<https://youtu.be/of-ksnPWwj>

3 各種委員会報告・大会決議採択・表彰等

<https://youtu.be/U7RaIAzzyuo>

4 地区奉仕委員長報告

<https://youtu.be/cDNCpktI84c>

5 記念講演 小池百合子 東京都知事

<https://youtu.be/F7U86ddaAN0>

6 ガバナーエレクト等挨拶

<https://youtu.be/rMu33dIWdmk>

※動画や画面のイメージ保存・転載、URLの一般公開(SNS等)はお控えいただきますよう
何卒よろしくお願い申し上げます。

■ 例会日 毎週木曜日 12:30~13:30
■ 例会場 〒103-8520 東京都中央区日本橋蠣殻町2-1-1
ロイヤルパークホテル TEL 03-3667-1111・FAX03-3667-1615
■ 事務局 〒130-0013 東京都墨田区錦糸1-1-5 Aビル6F
TEL 03-5637-4608 ・ FAX 03-5637-4611
E-mail tokyobay@club.email.ne.jp
HP <https://tokyobayrotaryclub.com>

■ 役員 / 会長 岡本 隆一
会長代理 原田 俊彦
幹事 原田 俊彦
副幹事 田中 保



会報委員長 市川 英治

「職業奉仕」を理解しないとロータリーが分からないので第14回に引き続き「職業奉仕—②」として書きました。

第十五回 「職業奉仕」はロータリーの根幹であり、中核だという意味

第十四回でも「ロータリーとは」「職業奉仕とは」で説明させて頂きましたがお分かりになりましたでしょうか。

「職業奉仕」については、沢山のパストガバナー、学者の方々が論じて居りますが、その中でも最も職業奉仕に関心をもっておられる詳しい先生、経営者の方々の解りやすい表現を抽出して下記に記します。

そして、私の「職業奉仕」観は、最後にまとめとして記述します。

◎深川純一¹パストガバナー

私のロータリー学の師として、亡くなられる前10年程ご指導頂きました。地区職業奉仕委員長時の2017年「職業奉仕、この素晴らしいもの」と題して講演も頂きました。同時に冊子を作成し配布致しましたが、その一部を紹介致します。

世の中に倫理を提唱していくこと、人間は如何にあるべきか、という倫理を守る人間、道徳を守る人間を作ることによって世の中を明るくしていこうという運動です。ロータリアンに奉仕の心を授け、倫理運動を提唱していく団体、即ちロータリアンの心の開発を第一義とする団体です。

故に、とにかくロータリーは人を育てること、道徳を守る人間を作ること、そのことによって世のため人のために動いていこうという倫理運動なのだ。それは、

標準ロータリークラブ定款第5「目的」の第2項は

- ロータリーが将来に倫理運動であることが一目瞭然に理解できる —
- これは「職業倫理」に関する規定であり —
- これは「職業奉仕の中核部分」なのである —

「ロータリーとは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である」と断言。

ここで、改めて深川先生の職業奉仕の論説を具体的にご披露致します。

所得を得るために行動する時の心、即ち金儲けの心と、世のため人のために奉仕する時の心とは、全く次元を異にしているわけであり。ところが、ロータリーは、職業を営む心も奉仕の心も共に同じ一つの心、つまり、金を儲けるために考えるエネルギーと世のため人のために考えるエネルギーとは、その向かっている方向は異なるが、その行動を起こす元になる心は、一つの心だと考えるのであります。即ち、一つの心をもって、職業を営み且つ奉仕をすと説くのであります。つまり、金を儲けること、職業を営むことが同時に世のため人のための奉仕になる、と考えるのであります。言い換えますと、世のため人のために奉仕する心をもって職業を営むべし、と説くのであります。したがって、この考え方では、必然的に、職業を営むことに、世のため人のためという倫理性を要求することにならざるを得ないのであります。即ち、砕いて謂えば倫理的な金儲けをすと謂うことでもあります。

深川先生の師であり「ロータリークラブ—その理論と実態と批判—」の著

この中の一部をご披露します。

◎小堀憲助²パストガバナー

「職業奉仕 (Vocational Service)」は、ロータリー運動が他の奉仕クラブに見られぬ、という意味で、ロータリー独自の実践運動である。

しかしロータリアンの中に、「職業奉仕」の意味の分かっていない者、したがって、ロータリーの本当の意味が分かっていないことになるロータリアンが多いのは残念である。このことは、ロータリーの親睦が精神的なものであることの当然の帰結であるが、その事実を理解していない者は、のっけから、職業は私利私欲の追求の営みであって、そもそも奉仕の適切なテーマでないと思ってしまう。かかることに起因する。そういう人たちは、毎朝起きたら、ロータリーの綱領とかロータリーの標語をお経のように読み上げ、この端的な言葉の味を常時噛みしめることから始めるのをすすめたい。ロータリーの標語はいくつかあるが、そのいずれをとってみても「職業奉仕」に関する標語なのである。このことは、ロータリー運動が「職業奉仕」を中心に発展し、今日もなお本質において「職業奉仕団体」であることを物語っている。

続く 

小堀先生の職業奉仕の決定的論説は以下となります。

「必然的に職業を営む過程に、世のため人のためという倫理性を要求する、故に、職業と倫理が一元となる」= ロータリーの定義 (深川PGと同じ)

2002-03年RI会長時のテーマ「慈愛の種を播きましょう」日本には何回も来日。親日家。

◎ピチャイ・ラタクル³(第94代)

ロータリーの中心概念は「職業奉仕」であり、個々のロータリアンの職業の倫理的水準を高めることによって社会に貢献せよということが目的でした。

帰する所ロータリー運動の目的は、会員個人の人格陶冶、自己錬成に外無らなかつたのです。

会員個人の人格の陶冶(とうや)という任務を忘れた奉仕活動は、やがてロータリーを内部から崩壊させることになるでしょう。

私達の創始者から受け継いでいるロータリーの基本原理を無視していくならば、これから先どのくらい長くロータリーが存続できるか、それを予言することはできません。

※「人格の陶冶(とうや)」の意

⇒人格を育成する・人格を高める・人間を教育する・人間を育て上げる

「職業奉仕がロータリー」と断言し、この精神で大企業経営をなした。

◎佐藤千寿⁴パストガバナー(2580地区/東分區)

職業奉仕の形骸化はロータリーの空洞化です。職業奉仕がある限りロータリーの社会的存在意義は失われません。然し、職業奉仕が無くなればロータリーの、ロータリーたる所以も失われます。

如何に会員の増大化をしようが、財団の資金が巨大化しようが、もう、その時は国際赤十字かユネスコの下部機構でしかなくなります。

組織の宿命として、ロータリーも他の団体同様、常に会員増強・拡大を叫び続けています。然し、何の為の増強・拡大か、その理念・哲学が示されていないのです。

ロータリーは精神的哲学を言っている唯一の団体。故に尊い。

ロータリーを学べ。只の会員でなくロータリアンとなれ!!

また、この人は

- ・職業奉仕のことを⇒「WAY OF LIFE」人は如何に生きるか、人の道、生活の姿勢だ
- ・「職業奉仕なくしてロータリーはない
- ・四つのテストのことを

⇒幸せになりたいと思ったら、先ず、人を喜ばせることを考え給え、とも単的に書いている

◎松下幸之助⁵(ロータリアン)松下電器産業会長

「業即信仰」商売はロータリーと同じく、天職(Vocational)の心に謙虚、誠実、勤勉のある種の宗教心を持って営む・の実践をなさっておられた と思う。自分の職業は社会にやらせて貰っている。言い換えれば社会に奉仕、貢献することによってのみ存在しうるのであり、そうでなければ、この仕事は全く存在価値がない。

自分の仕事の意義の自覚に立って、その大切な仕事に謙虚に誠実に、そして熱心に取り組み、世の中の求めに精一杯応えていくことが、職業奉仕として第一に考えられなくてはならないと思う(相手を思った物づくり)

企業というものは、言わば、天下の金、天下の人、天下の土地を擁して事業を営んでいるのである。その企業が事業活動を通じて、何かしら社会にプラスするものを生み出さないなどということは許されない。それでは企業の存在の意義は無いと言っていいだろう。(謙虚、誠実、勤勉に営むは勿論のこと)

企業の利益の半分は税金として国や地方自治体に納められている。

もし、各企業が軒並みに儲けるのを止めたら、国庫は大減収となってしまう。

社会保障も出来ない、教育の充実も、道路などの整備も出来ない、国民の福祉は大きく損なわれるというわけである。

企業にとって利益をあげることは誠に大切だということが分かる。

ここでいう利益とは、いわゆる暴利ではなく、社会の良識からみて妥当と考えられる「適正利潤」をさすものである。

いくら社会的責任を唱え、社会に奉仕貢献するといってみても適正利潤がなかったら、それも空念仏に終わってしまうのではないだろうか。

これからの職業奉仕というものは、世界人類全体に対するものでなくてはならないということにもなる。

相手の国に対するService(思いやり)、そのことが相手の国なり、業界なりに、不安と脅威を感じさせることになってはいないかということである。

裏面に続く⇒